毛利元就記

神戸大学附属図書館

蜻蛉日記中巻下

神戸大学文庫
神戸帝國図書館藏書

古今

いそのかみ乃ふるのをやまさくらはな
ゆへにこころのとまるらんと
ありしうたの心

なをとゝそをすてゝうきよ
をそむくひとゝなりぬれば
後撰

おもひきやうきよをすてゝ
いろにそめしこゝろをなをも
ふかくとは

とあるをよくこゝろきはめ
ていとかなしくあはれなる
ことはいとしてくれたる
人はなとゝきこゆる

なをとゝそこゝろきはめたるわ
ひとにて

ふちよねうくれたるひこばえいま
そいひさるをそしていでよときうをるよはふい
といえどかたかわのとをまいとかくれぼる
ときあるものなわきわてやかへつとをよて
てあれはれてるきかくこのしれともうきと
よとこびにるをはもいとせきあへぬまて
なんれほしくあるを天平そまけるを世く
れしをしわ
こびいけるやきそかれしきれく山乃
こ乃ちさを乃いとをいかきて
となんいふる世いよ大夫一百乃はかへつといそ度ハ

中ノ下一

殺んまるかん世うあつをなんをこそよいとい
えはなにもかてかくそみしつきえさをなく
こはせ世ほをしれいをなるのようわんまつで
かくこ乃とれをひてとんなる世をわよをん
まそでんとはへつもをふへわうまねハきらへさせ
んかまりなくいうきこいこたとたうあつをきんこ世
うきハいうたまるとたけあつをきんこたしうきハいう
なるとたうあつをきんとこ給へいあんにものつう
ひをきんなさこたきえ、さをそわをうこをみなかき
ていせこ世そこしハをいことこもわし伝い
世くこうう神いくこをするをひ称ふをこちてを

きくとうしきがなつてうをなるほどにおも
かへつと申る之ゝくいとねてわしうちはくゝえさは
乃ゝかもくいなよはいとねぶいえてきへつと
をえんびくゝよのうゝうがくへうちはくゝよくびよ
えゆるはたこなひよるにきるとやつよをもわ
をれはなんくゝわるをうくゝて又六日なほし
ををくゝをつへとうひよをのくゝしうわうごな
わまくゝあるをまづいうあかくゝはなにとみとせさ
せ給ようわんこなきるこうわらてはいくゝびんな
きわざをうとくゝうをよれりはやう光あること
をうまくゝづくゝうをよをいくゝとうとくゝうち

中ノ下一

ていとくゝ申くゝなくゝ日のうしかゝ申くゝひていとゆをと
れのほどをいのういうゝ者なくゝきくゝをいひてう
孫のうこゝをくゝとくゝるほどにおかくゝるくゝぬう
をのれかひくゝるにもわをは海にやよわくゝんや
をれかいくゝをくゝあるにまくゝのひくゝびくゝひさ
しくゝをくゝあるとねをくゝさ海のうものをくゝしわくゝまくゝある
ゝよくゝいひくゝをくゝをくゝをくゝをくゝをくゝうをくゝん
をくゝわかくゝをくゝしくゝをくゝらなくゝわくゝくゝをくゝのくゝをくゝにこ
をくゝよくゝつくゝとくゝをくゝのくゝをくゝまくゝんくゝをくゝくゝ海くゝよくゝと
くゝいくゝをくゝくゝくゝ

たつまき山ゐも半ゐ孫さ下ほし
物しかくてたなしま次をえまへどきてかるこ
とゐて給をしにぬ免もしなくしまぢへて
んあるとよろよろくをのれほしこ半るべ考るう
ゐ

よ八中ハれひ乃ほうよなるるきの
ゐうきとらちと半れきゐ分きん
みとをべてさしむひ半ゐんやうよこ海やう
ようききわるるるきとてそころまくわ
水なりきるゐくをゐんもいるもうぎわをものし
て半ゐつ孫

後撰

君をおもふふるさとへ
つのまろかりえ今ゐ
ゐるもあはれ

紀伊郡
大里 鳥羽
度波

ゐ乃れたりひ乃ぬうきゐ屋にきてかれ
ゐ乃ちあきわをもゐなるくて
ほうでんをはいろんもなけまどかく乃給ゐすなに
ゐつ給へとらひねをきれし

後撰拾雑中

分ひゐつ乃かくなる半きと見ねれハ
さうよかつわらぶををきわ
とえまハ半をしあれらしてをんなどを乃
ゐまるみいし乃かんれ殿まわかるひまつる所かくを
よらほれくうきくハうをねをよにしゐまわとう
いる半るをいうれほしきんゐあるゐくをよとだ
乃れほゐをよまわとあるをいをれうしをちひんん

題日本紀

をいうなるゐくゝ（ところ）まも（特）ゝ（る）ゝ（よ）さうあるをきんくし
ゐくにこゐうをふうちわるゝうちゝ（ち）さるにある俗の者
ゐ（い）ぞけうちわくゝ（ゐ）ゐのくゝがほうゝ（ひ）どとわうよう（え）ある
うどなるなをし

とゐ学にかつをきるをとしゝくものの

わるきさらはうるをきうゝ（ゝ）なを

やてたとしうちわかくゝたんと（え）ゐたくゝるほ
どよある人ひるつうゝ大向（乃）うさうむまの（乃）いなく
くこをして人乃わまるわるをしいゝうわゝ
乃ままわえとを（か）ゝやうゝ（ち）ばなうゝるほ人（ウド）
わまうえくてわゆゝくゝ（くる）ある（る）俗中間白殿乃

中ノ下

兵（ホ）
をを（え）ゝ（ち）をひやをしきるかゝやなあわくゝ（ち）ゝ（ち）ゝ（ち）ゝ（ち）
太夫ちわっ（ひ）ゝ（ち）ゝ（ち）ゝ（ち

はるみどしのしてゞうちよりはつ津ゝをこいひとし
ゆゝよりしうはんはんはん

いづこうんのちに物し給へいでんすくるる片
とくくれるおしとまでをと物し給へいとおも
しきこしにしあるかれいたせんこうこそはよこに
ゆしまくべくこそこのせじやだをひさくほどま
ゑ水浦と乃舟をくるとよよ平ぐいに風乃ふきる
きうたいきて天下乃とかとおひてぎよおくても
もつしまをとみしれよとふひたるをきをこゑうきこ
いとくちれしうたちわ平風ひよきりくやるこれ
物し祢きよを月みくばそろまんよ物し祢と
月もわをんうくよまいんちよどうこうひをみ
くいそをにいとちうるみとひとぐいわ隆と

さいハ粒あをそあきをれぬ

古今
いせの海ふかうき藻塩のうけなきやとてろかをろふさたあうのつる

もるあ月乃うあしろ色ひをこてにのくりとて
を乃まねさなかりとれをよにちとにはさたれ
こにとこハにつむよとをなくさくわゆとて平ぐいわ
いまばわびて光てしをしをひきよをてくくこ
くゑまとどなに乃ひをくうをちをくをしば
ゑ面遊仙窟ゑあぎをうちおきをとてをてわをとそ
ちしいとかくはをんどをとおをとはまいこくそ
をくやとゑはてきれハしきるうををしいて給ねを
くやとゑはてしまのでよたをとかくとて元ふえ
くうを光てをいをに光をてのをわるとハくこ
やくくをいとくくるくくすくぐいくハとうち

和名十四行旅具通俗云帛三幅曰帕 普賀反去声之重
帕氏曰幔楊氏漢語抄云夜幔 古路也 都仁美 蒋紡切韻云袋 音代字亦作俗和名布久路嚢名
和名十四屏障具軟障 本朝式云軟障一條同二十云金錢花梁簡文帝有金錢花賦 金錢俗云古無軟

うつぬしさしけるさけ
はやんもうくきんしうつくいで給しねをくく
ふかよせよいはをてねよ世ちしつくく
ちつをふくるものやを世やくをにけくをふく
よいるをきはいまてくをやんよをみいまさをひ
きをるせをくるをなどをしてるちくをわせるをの
やんうくくしやくをくをうちくをよんちく
わきれてわをうへんうにてわれはんしをえをくう
せいをくいをくうをえをてまうか升せるをしをこの
しかをうをれをいあるまひねをよをとそはちわ
れれよをこをのよくくせをまいのをこほうをる

やて天下のうをるうをと結いひのくふかうと
ゆわよ物をいをれをとうをるのをうけをと福人
しかくしてあるよをうをる金をせていをひをくく
をわねをるの時をのをうわよをものををいをを
祝よをわよをもの結をてうをよをしよ
永かいでをんきをんちよをを決をてをちいでねを
はをくくをやてかをくくわくしをなをきぬをしわよをばを
ひををなをきをいをでをるんちををさをうを永よをもあ
を大内ひきいををはをうをくををわをてをちうををを
ちをしわをひねををきをくをを決をうををわれををゆをうを
をのをいをいをまねををのををを大夫をんををうをを人をうを

きはわるなんそれをふかなるあまはやまと
ぞやきくいしかなどそるこしのくいるれど
よいの時はなわるゝ辛ゝ系よこのるとらは
いひしちるるんくんぞひしちるゝ（ひて）ぞ（ぞ）
きわまるちきしわまるしれまよきわぞれゝらゝ
ねゝらきしるるしきしれまよきわぞれゝらゝ
ちぬきあはうまあるんひゝうきてなき
ゝいんなぞしこゝろ辛ゝ（ゝ）ゝんやしゝゝゝかゝ（ゝ）
きゝうゝなゝるゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いまいゝぞきあるきねるきゝゝるゝゝゝゝゝ

きゝせてあるゝん物あるかゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝてゝゝ乃辛ゝ（ひら）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かしきわざかなゝぎをろやくにこちらきあくるど
あれバいえ〳〵をでわるものゝるれ〳〵いと中や
ゆくゝなきこゝ海にもあらべらなるるとゝひうて
さこにうゝまゝきれバゝゝわゝくこゝハをゝる
なれうゝわきなバゝそハあいわくゝへうゝれとゝなよ
きいゝ乃人ゆう乃物いゝよなゝねをゝものきゝわゝ
なゝやあゝをゝいひゝくいでねゝと先ゝくゝゝあ
ゝをあゝけゝきんでゝらゝいゝなゝやあゝゝくゝな
んいうゝおゝゝゝやゝゝゝをゝゝゝゝまひてゝゝこ
の中ゝゝのゝゝもふゝくゝゝにえゆゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝなゝゝゝゝゝゝゝゝ

人々つどひて、さて、海なんいでる海のぐぞ、
ときてなどいひしもをぞれしをつぬ、
とらせさんばなどとて、又れをよろしきかい
それがひるげうるとて、さいれのうぎわ手山
なるなし時かひしかうぎめとえまーやとて
どなてそうあるとあるをあやしくあさ海
しとそひさしぎわるわとをえよどうわの、
こどなるわるやうにぞえ、さるいうどうわのと
まとどにきうどやとうへしとそひうと
ふくほどまうどもしるうちのひつ
うきよとうへどうくものひるとをるう

中ノ下十

ぞとうまぎれさるをさてわあねをば太
夫をれどにわてようあるをんうまいうて
きんとをのをそくはるやうるまいてなん
あるをるよハうにいしくるかうをうどなん
えをのせどなるまわよしくなんのくまひけと
うしをだいうとよあくうをるとをだはほ
へをるさうるよだわるとをしとどうきうし
をにとそ海しとそひうるわどよないーの
かんのをのまわ品ふるとえれどまうしさうとて
ほしくていとわるれなるさ海よのうまえあを
うはさうどをまさるをさいををーたまうん

慶日本紙

さんどせんもさくら平氏しる人をわりやく
きくものとをあるしなんるさ氏よりくいのを
し世をまよわれバいをるぞとれぼけうをきよつ
ぬてを、

玉雑二 尚侍藤原隆子郎

いをせうはもしをかしのみうなは
人乃ゆきうのうをハえて氏し
ぬくつをよハ山乃をさひハ秋のきしきもを給
んとせしにまさうき時乃やをひよてみうぢ
らなんしぎさハちる人をみしとそれり
さまへしいうにきこし光しやるにうれぼめり
せ世を海のよををよまを

中ノト十一

よしやあれわせんをけをハいをを山
なうれ水乃ゆるもかりりきり
おとぢをきこゆるかくてぢ乃日ぢひまにて又をの
いくよなわねときくくわる日こなるさるくわる
又のひと日をうんんがしとやをんらりそなるに
ぢ妙ぬて元へれをんるひとよのををぐをきうくと
いひてをよいぢにをいぢきるをいをるをなを
よをみんをのしけるをいるしやをてやをえを
てくなんをしぢをもをくをわをもをなをつをひを
をしわくれぢをちをねをころよををのしけるんくい
うにやをてなんをいよきぬぢたりのちも七八月

やうねあるくわふきれとこゝろハ四せんをとわれハ
もしろとをよとそ侍しかとこゝ侍よかるわね
ころくるくるひをくひのもの時仟よハうしのちるあき
海しや中ゝうわなるのかハわ夢作るなどある
しもれと侍きさくよ梅とくひろそひて
ろれいろくもつてかこをひつるもよはう
よをぐらしをまきようちわ夢をとら
うごしきよいとそあやしきそれひろとう
ひてしてまるの日かるさて七八日仟わ仕
くつせいで中つとろときどうくをゞ人い
とれほくきくくくてものをあひつどろ

中ノ下十二

時仟よこのあぜちの大納言ろをやうゝ絵しゝ
ちの院よいうわ中わ人くうくてのちれどうる
ハけつゝにてめゞてハわくんよいまて作く
ろひ給ときくしさこ侍よまこの日よこそハ
ほくそハたにあほどをくわれよるうれと物ゝ
ちゝのあゞうわしゝ中るものくまう夢をゝ中ハ
そ中ゝうをのくこれなうわくそるものこそわそ
ゝれわゝうびやゝ梅くわゞのほねよくちものる
びうゝの中とふきすゞきいとゝ作くゝきつ
ゝしとのゝそれゆるこそるこうせハたゝ梅やう
にふきてかゝうのうさゝまきわれまハしゝのを

神之

海きわまりてえぶくしてわれとうらうちとまくで
きるとびくさにわぶるのかんよせこゆきうへかせし
うになりきわえ（彼方）ーかぜちとのれハーて物み
どもうせ給へかわーハわくれもわさきるるハ
うかふふよにさまあるきんとれりひけくれたじや
もわてでよるうとるまでるうひるうみ祇ど
きくのほうるうをゆきちごとえけくハ
かくしうとこきうとこ（こきうとこ）ハ平うわをハ
ひ祇のほうるまをうを祇なうもう
なとれぼへてなはえれたじあうけるうをよハひは
えていきうとてうをとををとるる又なうれおうー

中ノ下十三

しわえたなうわあやねれ侍ていをさ平ちてゆー
に生ちめていあいうをつをうハをしわえしをは平うを
であるとえるもわあたしのくれたくうわよろ
ぼよれぼゆるていいとれたたしとものさをじを
にきをしきにまきに侍くわをよう平ぞてのをう
ようるまやくかてうわうをるとをのにををひよのく
ちひまりなうわうハうをとをのにををひよのく
ぶなるるまやくまうわうをハうくとをく院のいとむつー
うをいえしのをうわみぶをうをうわるあれうう平うほどに原
ひもうくなれまをハくをハかをハてはいは
てにきてえてぶて平てまにをてうせぶ風よ

[illegible]

伊勢
年ふる井さまの八重へ
ゆもりしらえひもさむ
うまくさもなし

日本紀の歌に曰
今水とさひきみもひと
ものせり 元を井ハ郡の
あすう井まいらぬすい
山葵と作るべし

れをもしらずわそうにえわうしすぐまけをきれ
ふしすぐくまぎわきよくるとひきうけてえれば
こどもいとしれをうしきところなわきわよハきよ
けよみ井ものとしのまほしきれバなべやどわえ
をべしとゆのんとえんえるわいえしきわやや
まこわなしバひもわしかうしてハたちいち
よいこわてまいろことやうくていでつほ
どよ日を言ようてね寝やたれやまを火も
し半ばどふきをちでいえしいうけれバや
をしくるばふきをちで美乃見えちのうちして
いとゆしのいうなるよかとまでたりひまと

ウリト十四

うらうしてうらうへよいるを給きれハ雨をもうを
半ばでえたハこをのいとをあしきをうきをうを
ときくゆるうをものとるほしよいちわわ
れぼろきをれをよとれほんとくわるきよ物
れなへどなわよ半るをしるにどもアをわ
なわるくとおれれるうなわへうをて
ひげよのうをうをハとをでわるをわのまへを
さをうよいふ義くくと半くてとうきれをてをわ
ねをうれ人乃あきどくうにをんハをうにいとな
んうをうれうくゆをたいちよめへアてれ
見をうをハたどわをハれをるうケちねにら

喰唱 日本紀

もしめてあるもしたところゆき三やらをわ
ゐをとりづゝあ手をるにてをけくしてもの
をやうろ河みろまるわきちいにをとりみたと
にうちよりう姫神乃ばやうむとぐしてゐいしをとと
ゆがわけはしれいろやけて姫とりてうをれ
とこぐいよハさぐしるとをとにれをよてれて
われたさしたとてこるのうてるくとうぐ
ゐちいくらうあるとかちわちちわちちゐらひの
乃さしうちぐきところよてまし車よのわねさ
てきいかりところよハうるあしてやで所わな
さうよいしぐわきれハうるひうをとをくし

見
悪
方

セリフ十五

てんうわうきてさるくいさちうてえんやてきし
ぢしよをの中そをきをどやわうをていきてれを
中れハわしの乃さるくうひちうをこうどもをしま
るえさわけるとなんがいとれうしうえゆきて
うぐ中るゐちケなれてよ乃姫るもとうぐをい
をてわをむこれうをハかうせ中をひなんたよ
をほうよいまをてとなきやをどうをしさてきと
てのけんねさてもわうをどうやたられいろよひとよ
とをしやるいうをいさうまをどろゐハふるをるとに
ほくとうち中くのをとにやをとをしきれどろう
をやをんやうよををるあやてえれをるのあゆ

困
見
見
困
見
困

いとれほどわそれもうさんきさろくこのわ
あらつゆうもしわらまーきかぐるみうもいれでよ
くるしうハそらいぞあるよきけきするわまに
やうていけくとれりひつまとに人をこうじ学わし
えをのせぞまるこの日をの庭るとうなるよう
あるとはひ人よをとしとれりのしうもうろのはあを
きよもわざわきれバじんをくれほえてなれ
きいのあよう学ことものはるとあれハんく
そやくくとやくこのーてわうわ学れバをを
ちとをくふわうくしをわのハひーのとと
とくくをれりひろんそををうべしけとかく

中ノ十六

ハをくをあるうぎのちくなわ学れバるとけきくを
ういひるーわしれのかごとうちよなわよるる
をとさくよとれをくべうれーうをんハ月とよ
ハわをけちわよるさわれはわしまわ四月れいのを
いえとうあきくみうをくひどうわをくうわをくをなる
ーーハをてくハとくうきやまてられ修法せをとと
てるおとさて三四月をわねをとととをくてわう
いとくくうるむらほやげうるムをを学
人をよをものとこやきくしうさうねもけくき物と
てを人をあをとあるかくをとにきこゆるきをの
とは人をわうきよれりひまわをくをものとをう

せんかてなんゑ張こまわるゝ手のとまりたん
とてやんゑ寺の者しさこゝをなをわくしをもれとしれ
をゝ給ゝまをハゝ紙乃くゝをひもわいなゝたん
としをのゝ者わゝまをこを者ちゝくをゝとあるさて
三月許のほどゝよとゝ月なんやそゝゝさわゝくをゝ
ゝ氏紙よしもいゝをるゝ乃ゝれるひあくをゝよ
ゝれバゝまわゝ氏まなゝれバゝくをゝたゝもなのきゝう
よてゝ七八日のほどゝにゝ氏ゝをゝひゝをる長月の
氏ごゝまわいとわゝをゝれゝゝるゝ氏ゝらのゝをゝきなゝ毎
しゝて氏ゝゝと月氏もいとゝをゝくゝこゝをれゝちゝし氏
いゝゝゝをゝのあゝゝんゝれバゝくゝをゝわゝとゝ氏ゝゝ氏ゝ

中ノ下十七

文殊記ふてのゝ山氏ゝ度
ゝてゝるゝ山のゝとゝをゝこゝん
をゝゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝふ
をゝのゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かやれバゝをゝゝとゝをゝをゝるゝゝやいゝ毎ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

和名三
漢書音義云豚陟玉
反和名比美
辨色立成云之毛久知
手足中寒作瘡也
今俗云霜腫

をゝべてよれぬるとかひかくわらきなきうち
いとゝとるこゝろかなちさるゝわらはれてかなちり
よゝしらわらんだにねとゝとゝにてあるゝをいと
あやしゝれなゆゝをゝどゝをさもいゝはさえけさ
をゝえいゝしゝかんやろうゝろしゝをいとゝろ
かゝうゝえゝをゝのをゝとゝるゝゝゝをゝくゝちゝはゝしな
ゝんかゝてゝさゝくゝもいゝとゝわゝんゝなゝわゝるゝさゝんゝゆ
きゝくゝづゝゝきゝもゝしゝかゝれゝゝゝくゝちゝちゝゝしゝけゝかゝく
れゝしゝれゝゝゝをゝゝゝ

にもことゝそうケんじひしふと行れぬゆる
に　ぶ乃うえのてわ　れよものれぬゆんケ行ん
しがゝて人ゆ　ゆさ　ゆ
　　かわ　くれりひゆるいそのかゝ
　　さそうねゝわゝすひしものと
とうきていあ　いてんとれをよほとよをゝ
れりてのうしもわゆねとこ人のけれゆ
人ハえしをゝ　れのゝ　れやしとれぬよ
　　きのの人ゝう
けまれしあ　ゝしひわ　わいん
きわえう　ゝわんゝをゝもえきうゝね
なわきわゝとよ四車ゝそゝしゆゝよゝの

五四
はゝゝゝ

こなさどあなてふさもなてあしのて
れはくこ乃枠の中ともあやなきん
ちまわしてとれこひうるあ
とやうよてまい乃ひとこてにてこわよな
まよくわいえのやうなんよこにとに
うる人あれはくやをくてわうるよつき日
はさなこれよやひきあるとあれはあ海上
くとれりのそうるもいあうきよ人はとこハ
かてみとをいてこなくやうはくとさてき
のしるとをんれのこのこんてんきけハ
ちしをちちまけちんところのうきち

中ノ下二十

せ海ほしきをるわこよをえんをるゆきな
ないうこふるとつなたんきしのをクわみへ
みにこよ乃者てとれりひのこさこよをんし

於清ミこ中之下終